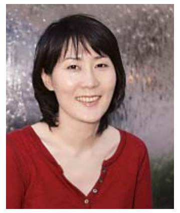
# INDEX

Saitama Arts Theater Press NO.12 Nov.- Dec.

03 ESSAY
彩の国シェイクスピア・シリーズ第18弾『オセロー』
赤坂真理
黒白がパラパラ変わるゲームの原点劇。

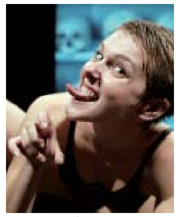
04 PLAY
彩の国シェイクスピア・シリーズ第19弾
『リア王』
娘が3人もいれば、悪い奴もでるか。

©大原狩行

08 TALK
公開対談 NINAGAWA 千の目(まなざし) 第10回
小栗 旬×蜷川幸雄
「ばかやろう、この淫売が！」50回！

©大原狩行

10 PLAY
『身毒丸(しんとくまる)』復活
藤原竜也 インタビュー
刻印の作品を封印、そして復活劇。


©Wonge Bergmann

12 DANCE
『死の天使』
ヤン・ファーブル
21世紀の昆虫記を描く死の天使

©NIKI

14 DANCE
『日本昔ばなしのダンス』
井手茂太×康本雅子
なつかしや、昔ばなしは身体に語らせろ。

15 INFORMATION
便利で楽しい特典のメンバーズ会員。

©K.Miura

16 MUSIC
埼玉会館ニューイヤー・コンサート
ウィーン・リング・アンサンブル
9人の男が奏でる春の曲。

17 MUSIC
ヴィオラ・リサイタル
清水直子
ゆっくりと時間をかけて芳醇のヴィオラ。

©Vincent Garnier

18 MUSIC
ピアノ・リサイタル
〜メシアン生誕100年を記念して〜
児玉 桃
メシアンの名曲、召し上がれ。

20 EVENT SCHEDULE & TICKET INFORMATION
イベント・カレンダー 2007.11.15-2008.1.31
前売りチケット発売情報（〜2008.1.15） 発売中公演情報

23 THEATER BRIDGE
イベント告知、募集など劇場からのご案内

24 Artist Diary 内山理名
『ボイトレの日 10月4日木曜日』
役者の喜び、とことん味わいたい。


表紙 彩の国シェイクスピア・シリーズ第19弾 『リア王』
PHOTO: 渡部孝弘 ILLUSTRATION: 竹井千佳
編集 :横山雅美 デザイン :ATAMATOTE International INDEX コピー :BASON
© (財)埼玉県芸術文化振興財団
Published on 15.NOVEMBER 2007 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation

© 高梨光司

赤坂真理◎東京生まれ。雑誌の編集者を経て1995年小説『起爆剤』でデビュー。主な著書に『蝶の皮膚の下』『ヴァイセズ／ヴァニーユ』『コーリング』『ミューズ』『彼が彼女の女だった頃』、コラム集『肉体と読書』など。『ヴァイブレータ』は廣木隆一監督、寺島しのぶ主演で映画化された。本年末に講談社新書が、来春に小説『スリーパーズ（仮題）』が角川書店より刊行予定。

【演出】蜷川幸雄 【作】W・シェイクスピア 【翻訳】松岡和子
【出演】吉田鋼太郎 蒼井 優 高橋 洋 馬渕英俚可 鈴木 豊 山口馬木也 壤 晴彦ほか
10月4日(木)〜10月21日(日) 全18公演

彩の国シェイクスピア・シリーズ第18弾『オセロー』10月18日公演より

# 赤坂真理

2007年の蜷川『オセロー』は、演劇史上に残るキャストによる傑作だったと思う。キャスト（役者）とキャスティング（配置）というものの凄さを、こんなに感じたことは私にはなかった。あの人あってのこの人のリアリティ、というような対関係がすみずみにまであって、その有機性が、ほとんどありえない悲劇を現実にしていた。そう、私にとってあれは「現実」だった！

役者の肉体は、作家の文体である。テレビより映画、映画より舞台と、その「文体」はシビアに問われる。そのうえ役者はたった一人で文脈である。しかも、描写である。いったいそんなこと、一人の人間に引き受けられるのか？ もしかして舞台芸術ってはじめっから許容量オーバーなのでは！

けれど人は誰しも、「自分を超えた何か」に触れたいとどこかで願っている。それが人に演じさせ、あるいは演劇を、観させる。役者がこぞって「蜷川マジック」を体験したがるのは、そこに何かがある気が私にはする。

蜷川幸雄は役者に厳しい人だとよく言われる。彼の求める感情表現とはなんだろうと、私はずっと考えている。私はそれに触れてみたい。

間違いをおそれずに言ってみるなら、現代人によくあるかんちがい、役者の感情表現を「役者の感情」の表現と取り違えることこそを、彼は禁じるのではないか。

私が役者だとして、感情を表現しようとしたらまず間違いなく「私の」感情で動こうとする。しかし私の「悲しい」と別の人間の「悲しい」は文体も文脈も描写も何もかも、ちがう。ある役には、その人間の自然と必然がある。「それをとことん考え抜け！」と蜷川幸雄は言っている、ように思う。そうしたら身体から出る台詞も、ただの言葉じゃなくて、相手に中に入り内側から相手を動かす、と。すごいのは、そのうえでどんな小さな役の人にも「お前を選んだのだから、お前にしかできない役を見せてみろ！」という態度で臨むところだ。それは一見矛盾している。けれど、ベーシックなところで無条件の肯定をしてるのだ。すごい……。だからこそ役者も自分を超えたものを出せるのかもしれない。

蜷川幸雄。たしかに役者には怖い人なのかも。でも、私から見れば「愛、ダダ漏れ！」の人だ!!